

The 16 Days of Activism Against Gender-Based Violence
ジェンダー暴力と闘う 16 日間キャンペーン

Raise Our Voices for EMPOWERMENT !
声をあげよう！私たちのエンパワメント

The Clothesline in Tokyo Empowerment March

2019 年 11 月 25 日－12 月 10 日

報告書



主催：上智大学 グローバル・コンサーン研究所

目次

はじめに	1
1. 概要.....	1
2. The Clothesline	1
2.1 手法	1
2.2 日本での実践.....	2
2.3 目的	2
2.4 実施体制	3
2.5 倫理的配慮	3
3. カードに書かれたメッセージ	4
3.1 問いの検討.....	4
3.2 カードへの記入.....	4
3.3 カードの分類	5
3.4 学生の感想.....	13
4. エンパワメント・マーチ	15
4.1 Girls March	15
4.2 プラカード	15
4.3 参加者の声	15
おわりにー当事者が自分の経験や想いを可視化させる意義.....	16
謝辞.....	16
English Summary	17
Background.....	17
1. Outline of the event.....	17
2. The Clothesline	17
2.1 Method.....	17
2.2 The Clothesline in Japan	18
2.3 Objectives.....	18
3. What was written on the cards?	18
4. Empowerment March	21
Conclusion-Significance for the parties to visualize their experiences and feelings.....	21

はじめに

上智大学グローバル・コンサーン研究所(IGC)は、2014 年より「ジェンダー暴力と闘う 16 日間キャンペーン」¹と関連づけて、女性・平和・安全保障(Women, Peace and Security: WPS)について学ぶためのイベントを行っている。日本軍の性奴隷制度の被害を受けた当事者の家族や、当事者の取材や支援に長年関わってきた方の話を聞き、沖縄の米軍による性暴力の問題や²、アルゼンチンの国家権力による性暴力などを記録する活動から、軍事主義とジェンダーに基づく暴力(GBV)について考える場を設けてきた。それらのイベントでは、日常における暴力との関係性が話題になった。しかし、学生の日常における暴力が可視化されていないことから、学生が自身の当事者性と向き合うことが困難であった。

2019年度は、アートという手法を用いて、学生が直面している力の剥奪(Dis-empowerment)の現状に目を向ける参加型イベントを企画した。レイシズムや障害の有無などによる差別、様々な形のハラスメントに遭いながら、あるいは、加害に加担していることに気づくことさえない自分たちの内なる声を可視化し、アンケート調査等では表現しづらい力の剥奪の現状を理解し、Empowerment のための言葉を獲得することを目指した。

1. 概要

The Clothesline in Tokyo

日時:2019 年 11 月 25 日(月)~12 月 10 日(火)16 日間

場所:上智大学四谷キャンパス中央図書館1階

協力:モニカ・メイヤー／Our Clothesline with Mónica Mayer／明日少女隊

設営・展示作業への参加学生数:45人

エンパワメント・マーチ

日時:2019 年 12 月 6 日(金)昼休み 12:55-13:10

場所:四谷キャンパスメインストリートと 6 号館 2 階バルコニー

協力:明日少女隊

マーチでプラカードをもって参加した学生数:16 人

動画記録:<https://www.youtube.com/watch?v=cuzVvgY1gm8>

上記の他、12 月 9 日(火)に駐日メキシコ大使館と共催で「移民女性のエンパワメント・ワークショップ」を行った。

2. The Clothesline

2.1 手法

The Clothesline は、1954 年のメキシコ生まれのフェミニスト・アーティストであるモニカ・メイヤーが、世界各地で実践している参加型アートプロジェクトである。人々の気持ちを引き出しやすい質問を考え、カードに書かれた思いを、物干し用ロープに吊るして展示する。女性や子ども、周縁化されがちな人々が日々直面する危険や、抑圧、苦難や危機が可視化される。カードを「読む」者の社会構造への疑問が呼び覚まされ、そこで「対話」が始まる。

¹ 米国ラトガーズ大学女性のグローバルリーダーシップセンター内 16 日間キャンペーン <https://16dayscampaign.org/>

² 田中雅子「セミナー報告「沖縄から考える非軍事の安全保障」」、『グローバル・コンサーン第 1 号』、61-72 頁。
https://dept.sophia.ac.jp/is/igc/pdf/jnl/001/6_Tanaka%20Masako.pdf

1978 年にメキシコシティの現代美術館で実施して以来、実施場所ごとに、「都市」、「災害」、「暴力」、「学校」(何が子どもたちを幸せにしないのか)などのテーマを選び、ハラスメントや排除、差別の経験を可視化させるための手法として、世界各地で実践されている。メキシコ国内の大学や市民社会組織だけでなく、2016 年にはメキシコ外務省の男女平等推進の活動としても実施されたほか、コロンビアやアルゼンチンなどスペイン語圏はもちろん、2018 年には洪水に見舞われた後のインドのケララ州コーチのビエンナーレでも展示された³。

2.2 日本での実践

モニカ・メイヤーは「あいちトリエンナーレ 2019」に出展するため、2019 年 6 月に来日し、名古屋大学などで公開レクチャーを行った。事前ワークショップでは、「最近、経験したハラスメントは何ですか？」など、参加者が修正を重ねて質問を最終化し、日本語と英語で質問が印刷されたピンクや薄紫の A7 版のカードに人びとが思い綴った。8 月 1 日の開幕後は、年齢・性別を問わず、多くの来場者が作品に共感し、女性だけでなく男性も、自分の思いをカードに記して参加した。しかし、8 月 4 日以降「表現の不自由展・その後」の展示が中止されたことに抗議の意を示すため、8 月 20 日より展示形式が変更された。来館者が書いたカードは床に散らされ、声を上げる場が奪われた状態を表現した。その後、10 月 8 日に「表現の不自由展・その後」を含む、すべての展示が再開した。

「あいちトリエンナーレ」の展示に関わった有志は、Our Clothesline with Mónica Mayer というグループ⁴を結成し、名古屋の「フラワーデモ」や「表現の不自由展・その後」の展示中止に関する抗議の中で The Clothesline を実施し、日本語の実施マニュアル作成や日本各地で普及活動を行っている。



「この作品は未来のすべての人たちのためにあります。
紙に自分の経験を描くという行為、他者の経験を読むという行為、
対話をするという行為、すべてがこのアートの真髄です。
このプロジェクトが歩んできた、そしてこれから歩いていく全ての事象が
この「The Clothesline」という作品そのもののなのです」

Mónica Mayer 2019 年 6 月名古屋大学でのワークショップにて

2.3 目的

本企画は「ひとりひとりがあるのままだに認められ、力を発揮できるキャンパスにする」ことをゴールとし、「学生や教職員にとっての差別、排除、ハラスメントの経験を可視化する」ことを目指した。

The Clothesline では、傷ついた経験などを思い出し、何が起きたのか、そのときどうしたかったのか、質問に沿ってカードに思いを書く。自分の身に起きたことだけでなく、居合わせても何もできなかったこと、自分の行動を悔いていることなど、いずれでもよい。また、自分が書くことだけが重要なのではなく、他の人が書いたカードを読むことで、同じ経験を多くの人がしていることに気づくことができる。展示を見ながら仲間と対話し、思いを共有することで、この機会に、気持ちの伝え方や介入の仕方を学ぶことに期待した。一方、エンパワメント・マーチでは、The Clothesline を通じて集めた体験をもとにメッセージを選び取り、それらを記したプラカードを使って、学内のメインストリートでアピールを行った。

³ The Hindu Business Line 2018 年 12 月 28 日 <https://www.thehindubusinessline.com/blink/read/monica-mayer-at-kochi-muziris-biennale-between-the-lines/article25849451.ece>

⁴ Our Clothesline with Mónica Mayer <https://twitter.com/ourclothesline?lang=en>

2.4 実施体制

IGC 所員の田中雅子は、名古屋でのワークショップに参加したネパール出身の留学生を通じて The Clothesline を知り、モニカ・メイヤーに上智大学での開催を打診したところ快諾を得た。モニカの出身国メキシコの大使館からも協力の申し出があり、学生を集める場として上智大学、移民女性の声を集める場として駐日メキシコ大使館の2カ所で The Clothesline in Tokyo を開催することになった。モニカは、11月14日(木)「国際協力論2(開発とジェンダー)」で The Clothesline とその広がりについて、学生に対してオンライン講義を行った。準備にあたっては、Our Clothesline with Mónica Mayer の協力を得た。

学内で学生を集める際、最も重要なのは、カードに記す「問い」である。2019年10月より関心のある学生に声をかけ、ハラスメントの経験を可視化させるために、自分の体験を書いてもらう作業を11月に2度行い、質問を最終化した。

カードは、11月25日からの展示に先立ち、モニカ・メイヤーのオンライン講義を行った11月14日に収集を開始した。中央図書館1階展示スペース、同7階グローバル・コンサーン研究所、10号館3階のダイバーシティ推進室に、カードと収集用ボックスを設置したほか、「国際協力論概説」、「国際協力論2(開発とジェンダー)」、「立ち場の心理学」などの授業で本企画を紹介し、関心をもった履修生にカードに記入を促した。学生に対する本企画の告知やカードの収集のために協力を得た教員名を「謝辞」に記載する。

本企画については、16days Campaign-Sophia University の Facebook で告知し、準備段階から関わった学生ら個人の Twitter や Facebook などで拡散させた。

カードにアクセスできない人のために、Google Form を用いてオンライン上でも4つの問いに対して書き込みができるよう用意し、Facebook で告知した。オンライン上で集まった意見は、カードに転記して展示した。

中央図書館1階展示スペースでの設営、展示、撤収作業、また、マーチのプラカードに記載するキーメッセージ選びには、総合グローバル学部、外国語学部、総合人間科学部、文学部、法学部、経済学部、総合人間科学研究科、外国語学研究科、グローバル・スタディーズ研究科から留学生を含む計45名の学生が参加した。

2.5 倫理的配慮

本企画は「学術研究」とは異なるものの「上智大学学術研究倫理に関するガイドライン」に則り、カードを書いた個人に配慮して実施した。

カードは無記名を前提とするアートであることから「同意書」や「同意撤回書」に相当するものはないが、カードが図書館で展示されることは最初に目的として告げている。また、カードの回収には箱や封筒などを用い、取りまとめをする者もカードを書いた個人が特定できないようにした。自分が書いたカードが図書館に展示されているのを見たことで、万一、苦痛が発生した場合は、自分のカードを外してもよいが、その場にいる人に、書き手が自分であることがわかるリスクがある。そこで、誰もいないときにそっとはずすことをもって「同意の撤回」とみなすことにした。これらの留意点は、カードに書いてもらう前に口頭で確認し、また展示スペースにも掲示した。

図書館内での展示の撮影の可否は、展示主催者の判断に委ねられていた。本企画については、カードを書くという行為へのさらなる参加や、来場を呼びかけるために、学生が発信することは奨励した。ただし、特定のカードだけを撮影して発信すると、カードの書き手の意図と異なるコメントが添えられて拡散される可能性がある。また、後日、本人が一旦展示されたカードを外して撤回しても拡散された情報の削除は難しくなるため、特定カードのみの撮影と拡散は奨励しないことを、展示スペースの注意書きとして添えた。

3. カードに書かれたメッセージ

3.1 問いの検討

本企画において、学生が最初に行ったのは、カードに記す質問の検討である。事前テストなどを通じて質問に修正を加え、その英訳を確認した上で、下記4つの質問に確定した。カードには番号ではなく■●□○のシンボルを用い、問いが印刷された4種のカードを用意した。

1) 学内・学外で、あなたが、他者からされて嫌だと感じたこと、傷ついたことは何ですか？

What made you feel most unpleasant or hurt by others when on-campus or off-campus?

2) 学内で、ハラスメントや暴力、排除を自分が受けたこと、あるいは目撃したことはありますか？

それはどんなことですか？どのようにして起きましたか？（自分が加害側であったことも含む）

Have you ever experienced or witnessed any cases of harassment, violence or exclusion around you on the campus of Sophia University? What was it? How did it happen?

3) あなたが、嫌だと感じたとき、あるいは傷ついたとき、本当はどうしたかったですか？

What could you have done when you felt unpleasant or hurt by others?

4) ハラスメントや暴力、排除に対抗するために、あなたは日々何かしていますか？何ができると思いますか？そして、これから何をしますか？

Do you do anything to fight against harassment, violence, or exclusion in your daily life? What do you think you can do about it? And, what are you going to do from now?

1)と2)は、過去の経験を聞くための問いである。1)が大学だけでなく、アルバイト先や家庭なども含んだ本人の経験を問う質問であるのに対して、2)は学内に限定し、自分だけでなく、友人の経験や目撃情報、自分が加害側になった経験も含む問いである。2)のように「ハラスメントや暴力、排除」と直截な聞き方をすると「ない」と反応してしまうが、「モヤモヤした気持ち」はあると感じている学生にも経験を書いてもらうために、1)「他者からされて嫌だと感じたこと、傷ついたことは何ですか」という問いを用意した。

3)も過去についてであるが、本人が傷ついたときにどうしたかったのかを聞いている。つまり、1)と3)は、自身の被害経験がなければ、記入することはない。2)も、直接または間接的な経験がなければ、書けない。4)のみが、今後についての質問で、自身の被害経験の有無を問わず、ハラスメントや暴力、排除に対抗するために自分にできることを尋ねている。1)2)3)について書くことがない学生にも「自分の経験などで思い当たることがない人も、これからできることについては書いてみてください」と働きかけた。

3.2 カードへの記入

展示開始前から、イベントの告知をし、関心のある学生にカードの記入を促した。授業の一環として行う際は、自分と他者を大切にコミュニケーションの手法として「アサーティブネス」を紹介し、No という気持ちをうまく伝えるコツを伝えた。

イベントについて Facebook 等で予告した後、カードにアクセスできない人のために、Google Form を用いてオンライン上でも4つの問いに対して書き込みができるよう用意した。それらは、カードに転記して展示した。

なお、カード用の紙には、濃淡が異なるピンク色や黄色を用いた。また記述した場所によって提供された筆記用具が異なり、油性マーカーで書かれたものもあれば、鉛筆書きのものもあった。ロープに展示する際、カードの色や文字の大きさ、濃さの特徴に配慮したが、記述内容への影響や関連は見られなかった。

3.3 カードの分類

集まったカードは表1のとおりである。「なし」と書かれたカードは数えていない。カードには、日本語と英語で問いのみが記されており、書き手の属性を記す欄はない。したがって、書き手が学生か教職員かなどの分類はできない。ただし、内容から、教職員による記述であると推察できるものは、10枚程度あった。

表1:質問別・記載言語収集カード数

質問	日本語で記述されたカード	英語で記述されたカード	計
1	250	15	260
2	130	7	137
3	200	12	212
4	205	14	129
計	785	48	833

4種の問いをすべて読んだ上でカードを選んでいないのか、2)のカードに他者の経験が記されているなど、質問と記述内容があっていないカードが見られた。また、自身の経験か、友人など他者の経験のいずれを書いたのか判断しがたいものもあった。日本語で記述した留学生もあり、また、英語で記述されていても留学生によるものとは限らない。1枚のカードに複数のことが書かれている場合、比較的長く記述されている事柄を分類の対象とした。

展示の撤収後に、学生3名が大まかな分類を行い、事例として掲載するカードを選んだ。分類後の集計結果を表で示す。ただし、記述内容だけでは判然としないものもあり、以下の分類は大まかな傾向を知りためだけのものである。ここでは、問いごとの傾向を述べ、学生が選んだ記述例を紹介する。

表2-1から5の「性差別／性別役割分業や異性愛の強要／SOGI ハラスメント」と「セクシュアル・ハラスメント／性暴力／性的搾取／痴漢／露出／盗撮／ストーカー」の分類は、異論もあると思われるが、ここでは、男性もしくは女性であることで特定の役割を求められたり、性別二元論ゆえの差別や、「彼氏はできたのか」など異性愛主義を強要されること、また、性的指向やジェンダー・アイデンティティの否定などセクシュアル・マイノリティに対する差別を前者とし、性暴力や痴漢、盗撮など性的対象として扱われることによって被害に遭った経験を後者とした。また、教員から学生へのパワー・ハラスメントはアカデミック・ハラスメントとも言えるが、表中ではアルバイト先や学生間の上下関係も扱うため、ここでは「パワー・ハラスメント」で統一する。

1) 学内・学外で、あなたが、他者からされて嫌だと感じたこと、傷ついたことは何ですか？

日本語・英語とも、相手などが明記されておらず、場所不明か公共の場だと推察されるものが半数程度ある。場所や相手が記載されているものを見ると、学外のアルバイト先の上司や同僚、大学の教職員、学生間、部活動・サークル内、親から、高校や中学校の教員や生徒間、異性パートナー、インターネット上の

順に多い。「嫌だと感じたこと、傷ついたこと」の内容として、学内とアルバイト先では「性差別／性別役割分業や異性愛の強要／SOGI ハラスメント」が、公共の場や場所不明では「性暴力／性的搾取／痴漢／露出／盗撮／ストーカー」が多い。一方、大学内の学生間では「いじめ／同調圧力」が、部活動・サークルでは未成年への飲酒の強要など「アルコール・ハラスメント」、アルバイト先の上司や同僚からは「パワー・ハラスメント」、親からは「家父長制の圧力／進路選択の不自由」の多さが特徴的である。表に続いて記述例を挙げる。

表 2-1:場所もしくは相手方別「嫌だと感じたこと、傷ついたこと(日本語記述分)」

場所／誰から傷つけられたのか？	計	愛主主義の強要／SOGI ハラスメント	性差別／性別役割分業や異性愛	露出／盗撮／ストーカーなど	セクシュアル・ハラスメント／性暴力／性的搾取／痴漢／露出	パワー・ハラスメント	モラル・ハラスメント	いじめ／同調圧力	身体や外見による差別	人種・国籍差別	尊厳や個性の否定	家父長制の圧力／進路選択の不自由	被害や病気への無理解／相談への不適切な対応	アルコール・ハラスメント	その他
大学															
教職員	12	1	1	3	1				2	1		1	2		
学生	14	6						3	1			2	2		
部活動・サークル内	9	3						3					3		
学外															
アルバイト先の上司や同僚	51	18		26				5	2						
顧客	9	7						1	1						
就職活動先	3	1		1				1							
実習先	1	1													
高校・中学															
教員	9	3		3									3		
生徒間	5							5							
親	20	5	1	1						3	8	2			
異性パートナー	2		2												
インターネット上	2			1	1										
公共の場／場所不明	11	10	27	25	10	15	10	6	2	1	4	1			
その他	2														2
計	250	55	31	32	29	22	22	16	10	10	10	9	7	7	

表 2-2:場所もしくは相手方別「嫌だと感じたこと、傷ついたこと(英語記述分)」

What made you feel most unpleasant and hurt?	Total	Sexual Exploitation Sexual Harassment/Molester	Racial/ Nationality Discrimination	Discrimination on lookism	Bullying	Alcohol harassment	Others
On Campus							
Faculty members or staff	1	1					
Students	2			1	1		
Members of student circles	1		1				
At work place							
Supervisors or colleagues	3		3				
Intimate partner	1	1					
Public space/Place un-known	7	4	1			1	1
Total	15	6	5	1	1	1	1

▶大学の教職員からーセクシュアル・ハラスメント

受講していた授業の教授から、個人メールに過剰にメールがきて「面談」を理由に研究室に何度も呼ばれた。成績をつける側、つけられる側の関係の中で、断ることはできなかった。言動も行動もいわゆるセクハラだったけど、大学がどうにかしてくれるのか分からない。

▶大学の教職員からー被害や病気への無理解／相談への不適切な対応

性被害をなくそうと訴える中で、SNS や噂で学生や教職員さんからあまりよくないことを言われた。慣れているつもりなのに泣く、吐く、震えるなど、トラウマ症状が出るようになった。

▶大学の学生からー人種・国籍差別

私は在日コリアンなのですが、大学の友だちに日本人みたいだねと言われたこと。特に悪気をもって言ったわけではないと思いますが、とても、モヤモヤが心の中に残ったし、私のアイデンティティであるルーツを無視された気がします。

▶大学の部活動・サークルでー人種・国籍差別

When I first entered Sophia University, I was planning to join the American Football Team, but when I visited their welcoming party, they excluded me due to the fact I was an international student.

▶学外 アルバイト先の上司からー人種・国籍差別

アルバイトの面接の時、店長から「あなたは日本人っぽいきれい」って褒められた。嫌な気持ちになった。

During a job interview/screening, the person in charge degraded me by putting the strands of my hair, forcefully holding my wrist, calling me stupid for having a cheap phone and asking me whether, I, a South Asian girl can do as good of a job as this other German girl working there.

▶学外 アルバイト先の上司からーセクシュアル・ハラスメント

Whenever my *tencho* (shop manager) kept making sleazy sexual innuendos at work and everyone else laughed about it and I feel like I had to laugh along too, in order not to stand out as being a *gaikokujin*.

▶学外 就職活動先ー外見差別

顔立ちが外国人っぽいという理由で就活中の面接で「ハーフですか」と何度も聞かれた。もし「はい」と答えていれない点があったのか。中身を見ようとしてほしかった。

▶高校・中学の教員からーパワー・ハラスメント

部活の顧問がストレスをあてるかのように集中的に私を怒った。けがをしても「けがは実力のうち」と全員の前で言われ、すごくムカついた。

▶親からー異性愛の強要

女性は結婚して子どもを産むのが当たり前のこととされ、「彼氏はできたか」「早く結婚してほしい」と言われる。

▶親から－性暴力

幼少期から父は私の体を執拗に触っていた(水着で隠すところまで触るので明らかにおかしいと気づいていた)。抵抗したら、激昂された。母に相談したが「お前が悪い、父に謝れ」と言われた。その時の「誰の金で飯を食ってるとかってんだ」的な言葉からは、この家の絶対的存在は自分だ、言うことを聞かないのは許さないという意味がうかがえた。この体験が親元を離れる動機になった。

▶親から－進路選択の不自由

私には夢がある。クリエイターになりたい。しかし父は私が女性であることから大手企業の一般職として入社し、結婚・出産をし、安定した生活をしてほしいと思っている。なぜ私の人生なのに親によって整備された人生を歩まなければいけないのか。本当は大学より、専門学校に行きたかった。

▶異性パートナーから

一緒にいただけなのに性的同意をしたと認識された。

I was told from my ex-boy friend as a "joke", 'women are meant to cook and have sex!'

▶公共の場／場所不明－性暴力

強い力で腕を離してもらえずトイレに連れ込まれて服を脱がされたこと。今でもトラウマだし、その人が普通に暮らして講義を受けていることがとても腹立たしい。気にしてしまう自分に対してもいらだってしまう。

I have been followed once by a man almost to my house. He then asked if I want to have "drinks" in the park. It happened multiple times that random men asked me on the street if I want to have "drinks", which I understood as sex, in a random hotel.

2)学内で、ハラスメントや暴力、排除を自分が受けたこと、あるいは目撃したことはありますか？それはどんなことですか？どのようにして起きましたか？

問いに「学内で」と記載したが「現在」と書かなかったため、大学だけでなく高校や中学校時代の経験について書いたカードも見られたが、多くは大学における経験を述べている。「目撃した経験」を含めた点に1)とは「問い」が異なる。

部活動・サークル内や学生間のハラスメントや暴力、排除をとりあげたカードが多く、部活動やサークル内での未成年者への飲酒の強要など、アルコール・ハラスメントや、先輩によるパワー・ハラスメントについて書いたものが目立った。学生間では、身体や外見による差別の経験のほか、尊厳や個性を否定するような発言について書いたカードもあった。なお、このカードについては教員による書き込みと思われるものもあった。表につづいて、学生が選んだカードを紹介する。

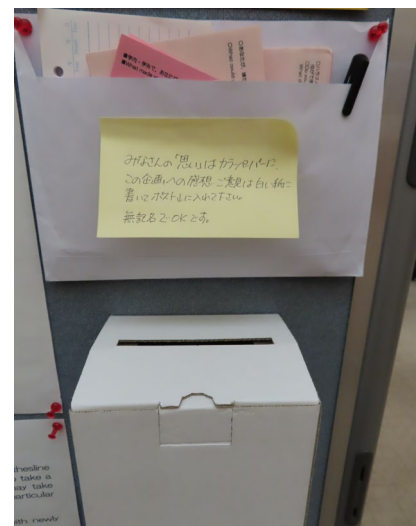


表 3-1: 場所・相手別「ハラスメントや暴力、排除を受けた、又は目撃した経験」(日本語記述分)

誰から誰に対するものか？	計	愛主主義の強要／SOGI ハラスメント	性差別／性別役割分業や異性露出／盗撮／性的搾取／痴漢／セクシュアル・ハラスメント	パワー・ハラスメント	いじめ／同調圧力	身体や外見による差別	人種・国籍差別	尊厳や個性の否定	被害や病気への無理解／相談への不適切な対応	アルコール・ハラスメント	その他
大学											
教職員から学生に対して	29	5	1	7	1	2	3	1	4		5
学生から留学生に対して	5						4				1
学生間	32	7		1	1	9		3	3		8
部活動・サークル内	44	10	5	10	3				1	13	2
その他	5								5		
高校・中学											
教職員から生徒に対して	9	4		2		1	1		1		
生徒間	4	1		2	1						
教員による書き込み	2										2
計	130	27	6	22	6	12	8	4	14	13	18

表 3-2: 場所・相手別「ハラスメントや暴力、排除を受けた、又は目撃した経験」(英語記述分)

By whom ?	Total	Sexual Exploitation/Sexual Harrassment/Molester	Bullying	Lack of understanding and inappropriate reaction towards survivors	Others
By faculty members or staffs towards students	2	1		1	
Between intimate partner	1	1			
Others	4		1		3
Total	7	2	1	1	3

▶大学の教職員から学生に対して－セクシュアル・ハラスメント

ウェルネス担当の男性教員がお手本を絶対女子にやらせ、指導するときに太ももや腰をさわっていた。

I was asked to have sex by my university professor!! He said he will give me extra credit.

▶大学の教職員から学生に対して－パワー・ハラスメント

(友人の経験)教授に、理不尽なことで怒られたり、就職活動の推薦状を書かないと脅されたりした。

学生がうるさいからでもあります、あまりに注意する時の言葉の選び方がひどい先生がいます。必修なので何も言えません。

ある国の文学について読む授業で、先生は「文学に正解はない、自由に発想をふくらませなさい」と言っていた。ある文学を途中まで読んで、結末を予想することが求められたため、自分なりの自由な意見を出した。すると「そんなわけないじゃない！」と強い口調で先生に指摘された。みんなの前で言われて恥ずかしかったし、先生の矛盾を腹立たしく思った。元々日によって気分や態度が違ふ先生だったが、その日はとりわけきつかったし、自分の内的状況により立場の弱い学生に当てるのはハラスメントだと思う。

▶大学の教職員から学生に対して－尊厳や個性の否定

宗教を信じる人への配慮が全くない。授業でも、宗教は非科学的で信じる人は馬鹿だといった趣旨のことをよく聞く。

During a class, a professor said, "Often, people who grew up in single parent households have issues, they lack something". Excuse me, I don't have issues, and I am very proud of my mother.

▶大学の教職員から学生に対して－被害への無理解／相談への不適切な対応

男女問わず教授がセクハラについて「セクハラまがいの～」、「よくあることだけど」など、加害者を擁護する発言をしたとき、ハラスメントを黙認する大人に腹が立つ。セクハラを受けたことがある身としてはその発言が私までも傷つけられたと感じる。

学外の人から暴力を受け、学校の場所を知られていたので危険だと思い大学に相談しました。ですが、授業に出続けられるようなサポートもしてもらえず、警備もお願いしたのに結果として加害者がキャンパスに入ってきたこともあります。私は一定期間学校を休まなくては いけませんでした。学校は、私の学ぶ機会を守ってくれないのでしょうか。

▶学生から留学生に対して－人種・国籍差別

留学生として排除されることがある。オリキャンのバスで隣に座ってくれる人がいなかった。

▶大学の学生間－性差別／異性愛の強要

浴衣デーまでに彼女・彼氏が出来ない男女を「カビ」「残飯」と呼ぶ風潮。根底には「大学生なら彼氏・彼女がいないといけない」という強迫概念がある。

自分のためにおしゃれをしているのに「その服、男ウケ良くないよ」などと言われる。いつも男が好きそうな女でいなきゃいけないのか？

▶大学の学生間－尊厳や個性の否定

私は満足してこの大学に入ったのに、他の有名な大学より劣っているから馬鹿だとか、就職で良いところに入れないと言っている人がいて傷ついた。自分の今までの努力も否定された気がした。

▶大学の部活動・サークル内－セクシュアル・ハラスメント／性的搾取

サークル内の伝統行事で女性が下着でダンスをしなければならなかったり、誰とセックスしたかを公表されることがあり、それを実際に見た。

部活の OB に後ろから突然抱きつかれた。先輩に嫌だと泣いて訴えたが「社会に出たらそんなことばかり」「大げさすぎ」と笑われた。

▶大学の部活動・サークル内ーパワー・ハラスメント

下級生のときに上級生から押し付けられたことを、自分が上級生になったときに下級生に押し付けるなど、1年生を苦しめる状況が様々な団体で見られる。

▶大学の部活動・サークル内ーアルコール・ハラスメント

男のみ1年生でも強制的に飲酒させられる。

▶高校・中学の教職員から生徒に対してーパワー・ハラスメント

大学入試の面談練習の際、高校の事務の先生に密室で傷つくことをたくさん言われた。自分の努力をばかにするような言い方をされてとても傷ついた。

▶教員による記述と思われるもの

小さい子どもがいることへの無理解(業務量、土日遅い時間の勤務の多さ)など、ワークライフバランスやくるみんマークとはよく言ったもので、教員は非該当なのか。

私には小学生の子どもがおり、時折りやむを得ず子どもを連れて大学に来ることがあります。、図書館内の研究室に子どもを連れて入ろうとした時に、受付の方々に「子どもの入館はダメです、子どもは託児所に預けて来てください」と一喝されました。大学内に託児所があるのは存じておりますが、小学生未満の子ども専用のもので、何より残念に思うのが、そのような排除的なコメントを私の子どもがしっかりと聞いていたことです。私は大学の規則を破り抵抗しようとしてはいません。しかしながら、どのような立場の人に対しても排除的な対応をとるべきではないと思います。

3)あなたが、嫌だと感じたとき、あるいは傷ついたとき、本当はどうしたかったですか？

表 4: 嫌だと感じたとき、あるいは傷ついたとき、本当はどうしたかったですか？(日本語・英語記述分)

何をしましたか？	日本語	英語	計
声をあげたかった／NOと言いたかった	78	0	78
言い返したかった／論破したかった／反発したかった	38	5	43
殴りたかった／仕返したかった／報復したかった	14	0	14
逃げたかった／その場を離れたかった	12	0	12
相手に理解してほしかった	12	0	12
誰かに話したかった／相談したかった	11	5	16
まわりの人に味方になってほしかった／慰めてほしかった	9	0	9
相手と話し合いたかった	5	0	5
受け流したかった	4	0	4
無視したかった／気にしないようにしたかった	3	0	3
気を紛らわしたかった／ひとりになりたかった	2	0	2
その他	12	2	14
計	200	12	212

自分を傷つけた相手に対して「声をあげたかった／NOと言いたかった」という記述が圧倒的に多く、「言い返したかった／論破したかった／反発したかった」が続いている。この問いについては、時期や場所、相手について記載されていないものが多く、分析は難しいが、非対称的な力関係の中で、声をあげたり、言い返したりすることができていないことが表現されている。また、相手と対峙するのではなく「誰かに話したかった／相談したかった」「まわりの人に味方になってほしかった／慰めてほしかった」など、周囲への期待も書かれている。これらの記述から、まわりの人に話したり、相談したりすることも難しいことがわかる。記述例は下記のとおり。

▶逃げ出したかった。NO と言えればよかった。私の勇気不足じゃないよね？

▶サークルで飲酒を強要されたとき、帰りたいかった。認められるべき自由に干渉されて苛立ちを覚えた。

▶対抗したかった。反発したかった。しかし、当時は自分自身が少数派であったため、そうすることができなかった。→結局、どんな問題も数的関係で解決するのか？少なくとも日本はそういう環境であると感じる。

▶サークルの宿泊行事は毎回必ず男性の先輩が全裸になるらしく、女子も含めて麻痺している。「ただ裸になるだけだよ。別に何もしないよ」って露出狂と同じでは？「目を覚ましてください」と言いたかったけれど、先輩たちだから言えなかった。

▶働いている時、お客さんから容姿のことや彼氏の有無を言われる。常連の人ほど何を言ってもよいと思っているのかはつきりと言ってくる。お客さんと言う立場上否定することができないためニコニコして受け流すしかない。

▶朝の満員電車で痴漢に遭い、気分が悪くなっていたときに、友人に「ねえ、こんなことがあったんだ」と連絡したら、軽いノリで下ネタで返事がきて、すごくショックだった。同情でもいいから、慰めてほしかった。

▶何か行動しても後悔するし、行動しないと後悔するし、どちらにせよ嫌な気持ちや傷は残る。その嫌なこと傷ついた出来事を経験したくなかった。

▶I could have stood up for myself.

▶I wish I could cry.

4) ハラスメントや暴力、排除に対抗するために、あなたは日々何かしていますか？何ができると思いますか？そして、これから何をしますか？

「NO と言う／抵抗する／意見を言う」など、自分を守るための意思表示が多く挙げられた。「ハラスメントをしない／相手を尊重する」など自分が排除する側にならないための行動の他、「ハラスメントする側に加担しない」や、暴力を受けている人などを見かけたときに声をかけるなど、被害者に寄り添う行動を書いたカードもあった。また、自分とまわりの人を守るために「学ぶ／行動する」や「嫌だと言える環境・社会

をつくる」ことも示された。一方、「何もする気はない」など、行動に移すのが難しいことが察せられる記述もあった。カードの一部も紹介する。

表 5: 日々何かしているか？何ができると思うか？これから何をするか？（日本語・英語）

これから何ができると思うか？何をするか？		日本語	英語	計
自分を守るために	NOと言う／抵抗する／意見を言う	65	8	73
	ハラスメントを受けないようにする	15	0	15
	逃げる／距離をおく	5	0	5
暴力を受けたり排除される人をなくすために	ハラスメントをしない／相手を尊重する	32	1	33
	多様性を受け入れる	5	0	5
	ハラスメントする側に加担しない	1	0	1
	声をかける／相談に乗る／話を聞く	25	0	25
	介入する／助ける	5	4	9
自分とまわりの人を守るために	暴力やハラスメントを見たら報告する	2	1	3
	学ぶ／行動する	33	0	33
	情報発信や知識の拡散をする	8	0	8
嫌だと言える環境・社会をつくる		5	0	5
何もする気はない		2	0	2
その他		2	0	2
計		205	14	219

- ▶セクハラを、付き合い、あるいは、笑いごとにするのではなく、きちんと嫌だと伝えたい。
- ▶厳しい目を向けられたり、差別的なことを言われている人がいたとき、その人に話しかけ、被害者のアライになる。
- ▶ちゃぶ台返し女子アクションのワークショップで介入の 3D(Direct, Delegete, Distract)について学んだため、ハラスメントに遭遇したら実行しようと考えている。
- ▶家族が無自覚に属性で他人をくくって、こうだから嫌だとか近寄りたくないというときに「別の視点もあるのだ」と伝えるようにしている。
- ▶なるべく素の自分を出さないようにする。人を信用しすぎないようにする。
- ▶It's important to say "No" if you don't want to , or you will regret the moment for so long. Don't make it unclear.
- ▶Never turn away from the problem if you are a witness of harassment. If you turn away, you are allowing it to happen.

3.4 学生の感想

作業に参加した学生からは口頭で、また展示を見た学生からは、授業のリアクション・ペーパーなどで以下の感想が寄せられた。

<カードに書かれた内容について>

- ・大学でこんなにもいろんなことが起きているとわかり、衝撃を受けた。
- ・サークルや部活動内でのハラスメントが思っていたよりも多くて驚いた。
- ・カードを見て、自分も部活動での欠席や遅刻をした際の罰金に苦しんでいるので泣けてきた。
- ・みんな普段は口に出さないが、日頃の生活で、嫌なことがあるんだと思った。匿名だからか、心の声を書かれていて、色々な驚きがあった。
- ・教授による性行為と単位の交換や推薦状を書かないなどの脅しが、こんなに身近にあることを知って恐怖を感じた。



<手法について>

- ・加害者側の人が見て「これって自分がしたことだ」と気づいてもらうにはどんな方法があるのか。
- ・女子学生のほうが多い大学だが、アルコールの強要など男子学生が書いたと思われるものも多いことが印象に残った。
- ・普段よかれと思ってやっていることが、相手にとっては、困惑したり、迷惑になっていたことにはとじた。
- ・気づきにくい相手の情動に気づけて良かった。
- ・デジタルより紙に書くほうが匿名性を保てて安心。
- ・大学側が、書かれていることを認め、対策につなげることを期待する。
- ・嫌なことをされても、嫌だと言えず、ずっと悔しい気持ちを持っている人も多い。それを表現する場があることはよいことだと思う。
- ・ハラスメントの体験を共有する機会があるのは良いことだが「皆、同じ思いをしているんだ。一緒に耐えよう」という方向に流れてほしくない。
- ・紙に書くという方法は、声を発しにくい人の声を広め、またそれに関わった人を通じてさらに広めることができる。
- ・いざカードを書こうとすると、すぐには思い出せず書けないのは、大したことではなく、普通のことなんだ」と思っているからだろうか。けれど、他の人が書いたカードを見て、フラッシュバックをしたり、自分はその時、本当は嫌だったんだ、あれは普通のことじゃなかったんだと気がついた。直接相談する場や話し合う場はありがたいが、私には参加できない。周りの人の声や経験を知るだけでも、すごく良い機会だと実感した。



4. エンパワメント・マーチ

4.1 Girls March

明日少女隊のメンバーの金明淳(Kim Myeongsoon)は、12月6日(木)の「国際協力論2(開発とジェンダー)」で、団体の活動と、過去に実施した Girls March、またメディアにおけるジェンダー・バイアスの事例について講義をした。また、彼女は、同日午後、マーチに参加する学生たちに当日の進行について説明し、リハーサルを行った。



4.2 プラカード

The Clothesline のカードに書かれたメッセージや、準備過程での学生のディスカッションから、マーチで使用するプラカード用に、下記4つのメッセージを選び、明日少女隊のメンバーがデザインをした。



4.3 参加者の声

2019年12月6日昼休みに、総合グローバル学部、外国語学部、総合人間科学部、経済学部、グローバル・スタディーズ研究科、総合人間科学研究科の学生ら計16名と明日少女隊のメンバー3名が、4種のプラカードを掲げて、キャンパスのメインストリートで約5分のマーチを行った。

学内で同様のマーチが行われたことはなかったため、学生は大いに緊張したようだったが、自分が考えていたことをアピールできたので、勇気を出して参加して良かったという声が多く聞かれた。参加学生へのインタビューを収録した動画は、グローバル・コンサーン研究所のWebサイトで公開している。



おわりに－当事者が自分の経験や想いを可視化させる意義

当事者が社会的排除や差別、暴力の実態を可視化させることは、聞く者が社会への認識を改める上で効果があることは、社会運動や学術研究によって検証されている。逆に当事者の声を封じることが、被害者への理解を阻んできたという歴史的事実がある。性暴力被害者の当事者の語りを分析することは、中南米、アフリカ、アジア諸国など、紛争下における性暴力被害者に対する真実究明委員会活動などで用いられてきた。

本企画では、学生が中心になってカードに記載する質問やマーチでプラカードに記載するメッセージを選んだ。アートという表現方法を用いたが、社会学や地域研究、社会福祉学、開発学などで用いられてきた参加型アクション・リサーチと位置づけることもできる。学生は、自身が忘れようとしていた経験をカードに記述することによって可視化し、カードの読み手に省察を促した。静粛を求められる図書館では、カードを読みながら、その場で見学した者同士が対話することはかなわなかったが、マーチという別の表現の場で、メッセージの一部はアピールできたのではないだろうか。

一方、セクシュアル・ハラスメントやアルコール・ハラスメントなど大学として対応が求められる記述もあったが、カードの書き手を特定することができないため、直接、当事者が抱える問題の解決に寄与することはできなかった。ここであげられた声を、学内における支援体制の強化や啓発に活かしたい。

謝辞

本企画の開催にあたっては、グローバル・コンサーン研究所の所員・事務局スタッフの他、学内の多くの教職員のみなさまのご協力をいただきました。授業等で本企画を紹介し、カードの収集やマーチへの参加を積極的に呼びかけてくださった下記のみなさまに、お名前を記して感謝します。

外国語学部英語学科：出口真紀子

国際教養学部国際教養学科：林道郎、村井則子

総合グローバル学部総合グローバル学科：権香淑、澤江史子

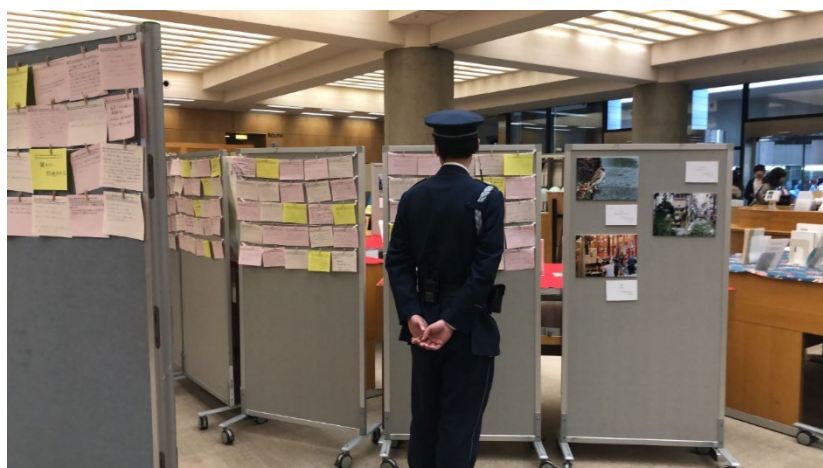
総合人間科学部社会福祉学科：笠原千絵、新藤こずえ

グローバル教育センター：杉浦未希子

言語教育研究センター：柿山礼美

（以上、敬称略、順不同）

報告書作成：上智大学グローバル・コンサーン研究所 所員 田中雅子



English Summary

Background

The Institute of Global Concern (IGC) of the Sophia University has been organizing a series of events on Women, Peace and Security (WPS) in connection with the "16 Days of Activism against Gender-Based Violence (GBV)" since 2014. The IGC organized the events to listen to the survivors' families of the Japanese military's sexual slavery, the activists working against the issue of sexual violence by the U.S. military in Okinawa, and the survivors of sexual violence by the state authority in Argentina. They provided students with opportunities to learn militarism and GBV from the survivors' perspectives. However, these events alone were not sufficient to let students understand how GBV is related to their everyday lives.

In 2019, the IGC organized a participatory art event to understand the current state of dis-empowerment students face. Through dialogue between the participants, this event visualized their own experiences of harassment and discrimination based on racism, sexuality, disability, etc.. It also revealed their hidden sense of prejudice or discrimination that may unconsciously contribute to the perpetrators. This event made the participants understand how they are disempowered in their own situation and express themselves for their empowerment.

1. Outline of the event

The Clothesline in Tokyo

Date: From 25 November to 10 December 2019

Venue: Central Library, Sophia University

Supported by: Mónica Mayer／Our Clothesline with Mónica Mayer／Tomorrow Girls Troop

No. of students participated in display work: 45

Empowerment March

Date: 6 December 2019

Time: 12:55-13:10

Venue: Mainstreet at Yotsuya Campus of Sophia University

Supported by: Tomorrow Girls Troop

No. of students participated in the March: 16

A short movie of the March: <https://www.youtube.com/watch?v=cuzVvgY1gm8>

2. The Clothesline

2.1 Method

The Clothesline is a participatory art project practiced worldwide by a feminist artist Mónica Mayer born in Mexico in 1954. Participants are invited to write down their thoughts about a series of questions on small cards, and then the cards will be hanged on a clothesline for display. Difficulties, oppression, hardships and crises faced by women, children and those who tend to be marginalized are visualized. The cards awaken the person who "read" them and let them start "dialogue" on various problems caused by social structures.

Since it was held at the Museum of Contemporary Art, Mexico, in 1978, Monica has selected themes such as "city," "disaster," "harassment," and "school" for different venues. The events visualized peoples' experiences of harassment, exclusion, and discrimination. Not only at universities and civil society organizations in Mexico, but it was also implemented as an activity to promote gender equality by the Ministry of Foreign Affairs of Mexico in 2016. Besides, it was held in other Spanish-speaking countries such as Colombia and Argentina. It was also exhibited at the Biennale of Kerala, India.

2.2 The Clothesline in Japan

Monica Mayer visited Japan in June 2019 to exhibit the Clothesline at "Aichi Triennale 2019" and gave a public lecture at Nagoya University and other places. Participants finalized questions at the pre-workshop and printed the Japanese and English questions on a pink or light purple A7 size card. After the opening on 1 August, many visitors, regardless of age or gender, appreciated the work, and not only women but also men participated by writing their thoughts on the cards. However, the exhibition format was changed from 20 August to protest the cancellation of "Non-Freedom of Expression Exhibition/Afterwards" after 4 August. The cards written by the visitors were then scattered on the floor, symbolizing the deprivation of a place to raise a voice. On 8 October, all exhibitions were resumed, including "Non-Freedom of Expression Exhibition/Afterwards."

Volunteers involved in the exhibition of the Clothesline at "Aichi Triennale" formed a group called Our Clothesline with Mónica Mayer, and organized the Clothesline for the "Flower Demo" and in protest of the cancellation of the exhibition "Non-Freedom of Expression Exhibition/After" in Nagoya. The group prepared the implementation manual of the Clothesline in the Japanese language and has been disseminating it throughout Japan.

2.3 Objectives

This project aims to "visualize the experiences of discrimination, exclusion, and harassment for students and faculty members" in order to "make the campus a place where everyone can be recognized as s/he is" At the Clothesline, the students wrote their thoughts on the cards responding to the questions about what happened and what you wanted to do at that time. For the Empowerment March, the students selected messages based on the Clothesline and prepared them to appeal at the campus's main street.

3. What was written on the cards?

The following four questions were selected by students and printed on the cards.

- 1) What made you feel most unpleasant or hurt by others when on-campus or off-campus?
- 2) Have you ever experienced or witnessed any cases of harassment, violence or exclusion around you on the campus of Sophia University? What was it? How did it happen?
- 3) What could you have done when you felt unpleasant or hurt by others?
- 4) Do you do anything to fight against harassment, violence, or exclusion in your daily life? What do you think you can do about it? And, what are you going to do from now ?

After the Clothesline, three students roughly classified the cards as shown below in the table E1 and selected some cards as examples for this report. The classifications of "gender discrimination/gender division of labor, imposing heterosexism/harassment based on Sexual Orientation and Gender Identity (SOGI)," and "sexual harassment/sexual violence/sexual exploitation/molester/exposing the male genitals/voyeur/stalker" may need some more explanation. Here, specific roles required because of being a man or a woman, discrimination due to the gender binary, forced heterosexism (such as being questioned, "Do you have a boyfriend?"), discrimination against sexual minorities and denial of gender identity are categorized as the former. The latter experience being treated as a sexual object such as sexual violence, molestation, and voyeurism. Power harassment by faculty members toward students can be called "academic harassment," but it is categorized under "power harassment" in this report as the table also deals with the hierarchical relationships such as the ones during part-time work off-campus.

1) What made you feel most unpleasant or hurt by others when on-campus or off-campus?

Table E1: What made you feel most unpleasant and hurt?

What made you feel most unpleasant and hurt?	Total	Sexual Exploitation Sexual Harassment/Molester	Racial/ Nationality Discrimination	Discrimination on lookism	Bullying	Alcohol harassment	Others
On Campus							
Faculty members or staff	1	1					
Students	2			1	1		
Members of student circles	1		1				
At work place							
Supervisors or colleagues	3		3				
Intimate partner	1	1					
Public space/Place un-known	7	4	1			1	1
Total	15	6	5	1	1	1	1

The people who harassed students were their bosses or colleagues at their part-time workplace, faculty members and staff, students, members of club activities, parents, and teachers and students of their high schools or junior high schools. As for "felt unpleasant and hurt," gender discrimination/gender division of labor, imposing heterosexism/harassment based on SOGI," are more on campus and at part-time work, and "sexual harassment/sexual violence/sexual exploitation/molester/exposing the male genitals/voyeur/stalker" is more at public space. "Bullying/peer pressure" and "alcohol harassment," such as forcing minors to drink alcohol, are also found. Some examples are shown below.

- When I first entered Sophia University, I was planning to join the American Football Team, but when I visited their welcoming party, they excluded me due to the fact I was an international student.
- During a job interview/screening, the person in charge degraded me by putting the strands of my hair, forcefully holding my wrist, calling me stupid for having a cheap phone and asking me whether, I, a South Asian girl can do as good of a job as this other German girl working there.
- Whenever my *tencho* (shop manager) kept making sleazy sexual innuendos at work and everyone else laughed about it and I feel like I had to laugh along too, in order not to stand out as being a *gaikokujin* (foreigner).

- I was told from my ex-boy friend as a "joke", 'women are meant to cook and have sex!'
- I have been followed once by a man almost to my house. He then asked if I want to have "drinks" in the park. It happened multiple times that random men asked me on the street if I want to have "drinks", which I understood as sex, in a random hotel.

2) Have you ever experienced or witnessed any cases of harassment, violence or exclusion around you on the campus of Sophia University? What was it? How did it happen?

Table E2: By whom have you experienced or witnessed any cases of harassment, violence or exclusion?

By whom ?	Total	Sexual Exploitation/Sexual Harassment/Molester	Bullying	Lack of understanding and inappropriate reaction towards survivors	Others
By faculty members or staffs towards students	2	1		1	
Between intimate partner	1	1			
Others	4		1		3
Total	7	2	1	1	3

- I was asked to have sex by my university professor!! He said he will give me extra credit.
- During a class, a professor said, "Often, people who grew up in single parent household have problems, they lack something". Excuse me, I don't have any problem, and I am very proud of my mother.

3) What could you have done when you felt unpleasant or hurt by others?

The majority of the statements were "I wanted to speak out / I wanted to say NO" to the person who hurt me, followed by "I wanted to talk back / I wanted to refute / I wanted to repel." Though it is difficult to analyze the cards that did not describe the context in detail, it seems to be that students cannot speak or talk back in an asymmetrical power relationship. Instead of confronting the other party, expectations towards others were written, such as "I wanted to talk to someone / I wanted to consult," and "I wanted people around me to be on my side/comfort." From these comments, it seems to be not easy to talk to or consult with the people around them. Other examples are as follows.

- I could have stood up for myself.
- I wish I could cry.

4) Do you do anything to fight against harassment, violence, or exclusion in your daily life? What do you think you can do about it? And, what are you going to do from now ?

Many participants mentioned their intention to protect themselves, such as "say NO/resist/give an opinion." Besides, taking the side of victims or not taking the side of harasser were mentioned, such as "do not harass/respect the other person," "do not participate in the harassment side," or "call out when you see a person who has been suffering from violence." Some participants further commented, "learn/act" or "create an environment and society that enable us to say NO." On the other hand, some other comments showed that it was difficult for them to take any concrete action, saying, "I have no intention of doing anything."

- It's important to say "No" if you don't want to , or you will regret the moment for so long. Don't make it unclear.
- Never turn away from the problem if you are a witness of harassment. If you turn away, you are

allowing it to happen.

4. Empowerment March

Kim Myeongsoon, a member of Tomorrow Girls Troop (TGT), delivered a lecture on Girls March organized by the TGT in the past and facilitated the Empowerment March with Sophia University students. The students selected four messages through a series of discussions for The Clothesline. The TGT member designed the placards with the messages.

A total of 16 students from the Faculty of Global Studies, the Faculty of Foreign Studies, the Faculty of Human Sciences, the Faculty of Economics, the Graduate School of Global Studies, and the Graduate School of Human Sciences and three members of TGT joined the March on 6 December 2019. The students seemed to be very nervous because they have never taken part in such an event on campus. However, they were glad to be able to express what they had been thinking.

Conclusion-Significance for the parties to visualize their experiences and feelings

Social movements and academic researches have verified that visualizing the reality of social exclusion, discrimination, and violence by the survivors is an effective method to change others' perceptions.

Students played a crucial role in selecting questions for the march's placards and messages in this project. The project was similar to participatory action research used in sociology, area studies, social welfare, and development studies. Writing on the cards, students visualized the experiences that they had wanted to forget. It encouraged the readers of the cards to reflect their attitude and behaviour. The students did not talk to each other while reading the cards, but they could express their wishes at the march

Some cards depicted sexual harassment or alcohol harassment that the university was required to deal with. However, the event could not directly contribute to solving these problems. We need to utilize the voices raised here to strengthen the support system and raise awareness at our university.